

合気道——その歴史と技法

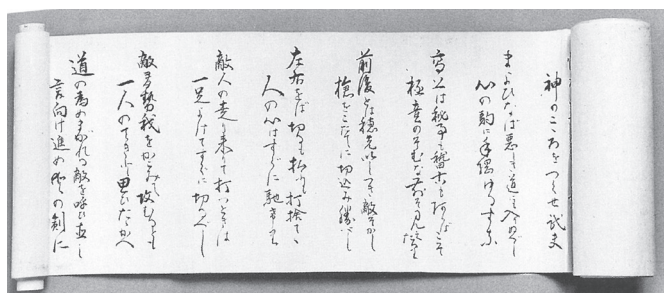
合気道開祖誕生

合気道の歴史をひもとくうえで、まずは合気道開祖・植芝盛平翁うえしばもりへいの足跡からたどる必要があります。

合気道開祖・植芝盛平は明治十六年（一八八三）十二月十四日、和歌山県西牟婁郡西ノ谷村にしむろ（後の田辺市）に植芝家の長男として生まれました。

植芝家は二町歩（約二百アール＝二万平方メートル）ほどの土地を有する富裕な農家です。開祖の父・与六よろくは村会議員を務める村の有力者であり、明治二十五年～四十三年（一八九二～一九一〇）の長きにわたってその要職を務めたことから人望の厚さをうかがい知ることができます。

二十貫（約七十五キロ）ほどのたくましい体つきの人物で、怪力の持ち主であったという話も残っています。ちなみに曾祖父である吉右衛門も怪力無双であり、田辺藩の御前試合にも出たという伝聞が残っています。

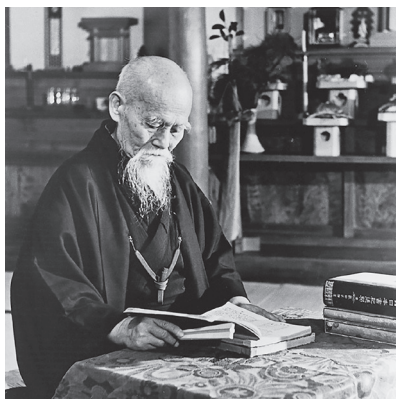


開祖は多くの道歌を残されている

与六の気性ははげしく、かなりの癩癪もちであったようですが、開祖は、与六にとって四十歳にして初めて恵まれた待望の男児（あとは姉の長女・ため、次女・ひさの、三女・ちよ、妹・菊）であつたため、開祖に対しては声を荒げることなく愛育したそうです。後に述べますが、開祖が上京し事業を興す時、北海道の白滝村開拓の時、また若き日の数々の武術習得のための教授料など、その都度、資金的援助を行い家産を消費したことからもその寵愛ぶりがうかがえます。

母・ゆきは同じく田辺市の糸川家いとがわの出です。父・与六とは対照的にしとやかな、情にもろい人であつたそうです。和歌に巧みな人で、多くの道歌を残した開祖にその文才が受け継がれているのかもしれませんが。開祖の妹・菊も師範学校卒業後、教員生活を送りましたが、短歌・詩・俳句のすべてに水準を抜いている、とその道の専門家が言うほどであつたそうです。

吉祥丸二代道主は、



開祖にふける読書

「糸川家のこうした文の血統は、合気道の成り立ちになにがしかの影響をあたえたように、私などは考えている。開祖の洞察力やひらめきを、『詩人的だ』と評した方が何人かいるが、決して理由なきことではないと思う」(『合気道開祖・植芝盛平伝』)

と述べています。

これらのことから、開祖は文武の資質を生まれながらにしてもっていたと考えることができます。

しかし、妹・菊の回想によると、幼少時の開祖は心身ともにひ弱なところの目立つ子であり、内向的な読書好きの少年だったようです。いつも部屋にこもっては積み上げた本をむさぼり読んでばかりで四書五経のおさらい、英雄豪傑の講談本も好きなようでしたが、それよりも物理や数学の本が好きで、読むでは考え、実験に熱中していました。

また近所の寺の学問所に通っては、四書五経を習っていたそうです。



開祖が「四書五経」を学んだ地蔵寺

この学問所は開祖がよく「地蔵寺の密乗さんに教わった」と語っていたことから地蔵寺のことと思われます。田辺は熊野三山をひかえている土地で、早くから真言密教が布教されており、この地蔵寺も真言系です。

開祖は、作家の貴司山治氏（元合気会評議員）には、ふじもとみつじょう「藤本密乗和尚から四書五経を教わったが、ようわからんので、居眠りしそうになって閉口した。それよりも密教の鎮魂法やら加持祈祷がおもしろうて、見様見真似で、あらかたの修法はのみこんでしもうたよ」〔合気道開祖・植芝盛平伝〕

と語っています。

また開祖は熊野地方に伝わる弘法大師の奇跡説話に感情移入し夢想することも多く、こうした開祖の志向を見て母・ゆきは本気で僧侶にすることを考えたようですが、父の与六は跡取り息子が僧門に入ることに対して断固反対したそうです。



植芝盛平翁・頌徳碑（田辺市立武道館）

いずれにしても、この頃の経験がその後の開祖の言動に影響を及ぼしていると考えてもさしつかえないでしょう。後に父・与六の危篤の際に、祈禱の依頼に大本教の出口王仁三郎氏を訪問し、なんの抵抗感もなく、その説くところを理解・共鳴し帰依していったことに不思議はありません。

合気道の平和的な思想は、開祖の故郷・熊野信仰と関係があるように思います。熊野信仰は自然崇拝からきていますが、やがて神仏習合となります。そういう争わず受け入れるというおおらかさが、熊野が世界遺産に登録された一つの理由と聞いています。熊野の大自然の中で育ちながら身につけた自然宗教の知識が、合気道の精神の根底にあるのではないのでしょうか。